



人と出会う、本と出会う

小澤征爾さん訪問記

平成17年度版「国語」六年(下)
「今、君たちに伝えたいこと」(談話)
小澤征爾

作家 工藤 直子

長野県松本駅に降りると、秋の眩しい光があふれて、風景が透きとおっていた。わたしは深呼吸をして(いよいよ明日、小澤さんにお会いするんだ)と、ちよつとドキドキした。

二〇〇二年のある日、光村図書の小学校国語編集部から依頼をいただいた。

平成十七年度版六年生の教科書に、世界的指揮者小澤征爾さんの文を載せたい。了解の返事をいただいたが、「自分の思いを語るので、それを誰かが文にまとめてほしい。」とのことだった。そのまとも役を工藤さんをお願いしたいという趣旨だ。

わたしは喜んでお引き受けした。

小澤さんとは、一九三五年生まれの同年である。彼が世界にデビューして、『僕の音楽武者修行』という本を出したとき、二十代のわたしは、それを読んで感動した。目的に向かつてまっしぐら。こんなに自由で、懸命な生き方をしている人が、同世代にすることが嬉しく誇らしかった。(「同世代」ってことだけで我がことのように思える、ってよくありますよね。ファン心理のひとつであります。)

話をうかがう日は九月二日に決まった。ちょうどそのころ、小澤さんは「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」のために日本滞在中で、二日のプログラムは「子どものための音楽会」。長野県内小学校六年生を対象にしたコンサートなのだ。――六年生の教科書のための話を、六年生たちへのコンサートの後にうかがう――なんというタイミング！ わたしは、この日のために改めて著書や関連した本を読みまくり、指揮をする小澤さんのビデオを見まくった。(インタビュの仕事のとき、わたしはいつも一生懸命下準備をします。一步でもその人に近づいておきたいし、またそうすることがインタビュの礼儀であると思うから。) 会見日の前夜、わたしは彼の著書を読み返しながら眠った。

当日。まず数百人の子どもたちといっしょにコンサートを聴く。会場は、はじけるように賑やかだ。普通、クラシックのコンサートというと、コホンと咳をしなくても

ばかられるような雰囲気だが、この「お祭り」のような会場で、小澤さんはどんな指揮をされるのだろうか？ わたしの心配は杞憂に終わった。壇上の小澤さんは、あふれる笑顔で子どもたちを、その騒がしさもひくるめて楽しく包み込み、ぐいぐいと子どもの心をとらえていく。

「若い世代に音楽の魅力と楽しさを伝えたい」というのをライフワークのひとつにしている小澤さんの心が伝わり、わたしもまた、子どもといっしょに聴き惚れてしまった。

終了後、いよいよインタビュだ。しかし、分刻みで予定が入っている小澤さんだ。インタビュも目白押しで、我々はその何番目かになる。持ち時間は三十分。どんな話をうかがえるか楽しみに待ちつつも、(小澤さん、お疲れでないかなあ)と気になった。やがて、「はい、お待たせしました。」小澤さんは、ニコニコして我々の待つ部屋のソファに座った。疲れの気配の微塵もない、爽やかな表情で。

まず小澤さんの少年時代の話をうかがう。六年生みんなと同年代のころ、小澤さんはどんなふうだったのか、それを将来この教科書を開いてくれる六年生たちに伝えたいのだ。

病弱だった話、農作業の手伝いや野球をやることで丈夫になった話、ピアノ体験等々：小澤さんは、実に愉快そうに話してくれた。祭りの太鼓を叩かせてもらった話などは、机を叩いて音を再現し、身振りまじりで、まるでそこに少年の小澤さんが現れた感じだ。

我々は小澤さんの気さくな語り口に引き込まれ、気がつくと予定の三十分が大幅に過ぎていた。恐縮しつつも、とても嬉しかった。

夢をしっかりと持ち続けていること。そしてそれを自由な心で羽ばたかせること。それが小澤さんに会って得た、六年生へのメッセージだと思ふ。

(このメッセージが伝わりますように) と願いながら、わたしは教科書に載せるための文章をまとめ始めた。